

村半利活用検討会（令和3年度第5回）結果報告

日時 令和4年3月30日(水) 午後4時～5時15分

場所 村半 大会議室

出席者 検討会メンバー8名、事務局(企画課)4名

内容

1. 協議事項

(1)利用状況等について

- ・令和4年1月から2月末までの利用状況や占用利用実績等について説明
- ・今後の占用受付について

2. 発表・報告

(1)斐太高校FRH重点活動(村半活用検討)グループの成果発表について

中井悠理さん、田中心結さん、大池ひかるさん、野首咲さん、齋藤結衣さん、門前凜音さん

(2)若者の利活用の状況報告について

飛驒ジモト大学 丸山 純平さん

<意見交換、質疑> メ:構成メンバー、事:事務局

斐:斐太高校FRH重点活動(村半活用検討)グループの成果発表メンバー

丸:飛驒ジモト大学 丸山 純平さん

○協議事項について

意見なし

○発表・報告

(1)斐太高校FRH重点活動(村半活用検討)グループの成果発表について

メ:みなさんは村半を利用しているか。

斐:(全員)利用している。

メ:高校生だけでなく、様々な世代と交流したいという意見があったことは意外だった。そのように思われた理由は何か。

斐:学校や図書館などの場所で高校生同士が集まりつながる機会はあるが、多世代で集まる機会はほとんどない。全く知らない人と出会うことができる場所を考えたときに、誰でも利用が可能な村半というオープンな施設を活用することで、多世代の方と関わるができるきっかけが作れたら良いと思った。

メ:どのような世代でも参加できるイベントが現在市内でも開催されているが、高校生の皆さんは、どういふもので情報を集めているのか。また、受け取りやすい発信の方法があれば教えてほしい。

斐:学校での宣伝が一番わかりやすい。他にはInstagramやツイッターといったSNSは不特定多数の若者の目に入りやすいと思う。

メ:皆さんは広報たかやまは見ているか。

斐:(全員)見ている。

メ:いくつかイベントのアイデアがあったが、誰が主体となるべきだと思うか。村半、地域の大人、高校生の誰が企画すると良いと思うか。

斐:先ほど発表した外国人の方に参加いただくイベントは、春休みの間に開催したかったが、新型コロナウイルスの感染拡大のためできなかった。私たち高校生が主体となって実施したかった。

メ:数年前に卒業した高校生からは、都会に行きたいという声が多くであった。皆さんはどう思っているか。

斐:都会の大学に行きたいという気持ちが強いが、高山に戻りたいという気持ちもある。高山には地域のつながりもあるし魅力もある。

斐:大学や就職先を考えたときに県外に出たいという気持ちがある。都会が良い、田舎が嫌だということは思っておらず、学べるチャンスがあるならどこでも良いと思っている。高山は暮らすという点では良いまちだと思うので、いずれは高山に戻れたら良いと思うし、学べる機会が高山に増えていけば、高山に戻って学ぶことも良いと思っている。

斐:都会で仕事をしたいと思っておらず、将来は人と関わる仕事がしたいと考えており、高山で働き、地域の方とつながりを深めることができれば良いと思っている。

斐:将来は学校の先生になりたい。夢は教えてもらった先生と一緒に高山で働きたいと思っているので、高山のことを考えるためにも一度は市外に出て、いずれ戻りたいと思っている。

斐:都会に住むことは怖いと思っている。高山に大学があれば高山を出たくない。高山祭についてテレビで放映されていれば見たいと思うし、高山には愛着がある。理由は無いが一生高山に住みたいと思っている。

斐:高山が好きなので、できれば大学は県内にしたいし、将来は高山に恩返しをしたいと思っている。

メ:今日の発表は女子だけだが、男子はどう思っているか知っているか。

斐:わからない。

メ:とてもうれしい。県外に行くとも高山に戻れない状況もあると思うが、高山がかっこいいという雰囲気が出ると良い。高山って良いな、かっこいいなと思えるようなまちを作っていければ良いと思う。

(2)若者の利活用の状況報告について

メ:一緒に活動されているメンバーには移住されてきた方がいるとのことだったが、高山に魅力を感じて移住されたのか。

丸:市内の事業所に就職したい方や、仕事の異動で来た方、転職先を探していて候補の一つが高山であったなど理由は様々である。住んでみて飛騨が好きになったという人の割合は多い。

メ:作成されているフリーペーパーの名前「SOSHA」は、「そしゃ、やらまいか」の意味か。

丸:そのとおり。新型コロナウイルス感染症の影響で活動が制限され、「じゃあ、フリーペーパーでも作ってみようか」という思いもあって、その名前にした。

事:ジモト大学は多世代のつながりで、平成会が同世代のつながりで、先ほど斐太高校FRHの発表にあったタテとヨコのつながりに実際に取り組まれていると思った。村半を利用されている理由をお話されていたが、村半の利用しやすさや良さのようなものあれば教えてほしい。

丸:施設がきれいな点や、費用がかからないことが大きい。料金を徴収するようなイベントの場合は他の施設を使うなど使い分けをしている。文化会館では若者がゲームイベントを行っていたが、駐車場の広さなどが理由で使われていた。それぞれの施設をうまく差別化できると良いと思う。

事:スタッフの関わり方はどうか。

丸:自由に活用させてもらっている。スタッフがいることによる安心感があり、すぐ相談させてもらったり

している。私たちの世代は勝手に活動しているが、高校生や大学生は相談したいこともあると思うので、そのようなところをスタッフが対応してくださっていると思う。

メ: 同世代の交流が少ないという悩みは、様々な世代にも言えると思う。丸山さんの活動は素晴らしいと思う。丸山さんは青年会議所にも参加されており、青年会議所にも交流の場があると思うが、平成会の活動に意義を見出された理由は何か。

丸: 青年会議所は平均年齢が高く、かつ会社員も少数である。また、移住者が数%と少なく地元根付いた若手経営者が多い。平成会とはコミュニティが違うという感覚があり、それぞれ属して活動している。

メ: 地域をみると若者がいないし、住む人が少なくなっている。安川の商店街や上三之町を見ると、どれだけの人住んでいるのだろうと思う。まちづくりに大事なことは住み続けることであると思う。平成会には移住者が多いと伺ったが、地元の方や特に古い町並に住んでいる方はどれくらいいるか。

丸: 参加者はいるが、他のコミュニティを持っている方もいる。移住者はそれぞれアパートに住んでいることもあり、情報収集の仕方が私たちと違う。また、町内会のようなコミュニティと近づけない移住者の方もいる中で、同世代とつながることができる場づくりをしていくことは面白いと思う。

メ: この辺りに住んでいる若者も集めてほしい。また、移住者の方もまちなかに住んでもらえるような活動もしていただけるとありがたい。

○その他

メ: 村半には若者と大人が結びつくことで未来につながっていくという設置目的があると思うが、若者だけが結び付いてもまちの未来づくりにつながるとは考えにくく、多様性ということ考えると、若者と大人が結び付くことで未来ができていくと思う。今日、高校生の発表があったが、発表の場と会議の場と分けていることに違和感があった。高校生は発表だけの参加ではなく、この検討会に最初から最後まで参加してもらっても良いと思う。子どもの成長認識について、子どもたちだけの活動だけよりも、大人との関わりがあると成長がさらに高まるということがデータで出ている。高校生は大人と関わることで成長し変わっていく。また、ジモト大学に参加した高校生のピフォー、アフターを見ると全く思いが違っていた。自分たちが調べるだけではこれだけ変わらなくて、大人と関わることで、大人や仕事って良いな、という気持ちを持つと思う。

メ: 若者の意見や発想を聞きたいし、それに対して意見も言いたい。そのような機会を作してほしい。

メ: 高校生を異世代との交流や社会に引き込んでいくことが大事だと思うし、今日の高校生の発表で高校生が異世代の交流を望んでいるという認識がなかった。高校生は勉強や部活で忙しいという認識で、土日のイベントの計画は難しいと思いためらっていた。わたしたちは、若い方に伝統建築や歴史について学んでほしいが、どうアプローチしていけば良いかと考えているため、連絡の取り方や呼びかけ方など、学生に参加してもらうためのノウハウを教えてください。

メ: 今の高校生は存在感をすごく大事にしている。食べ物やお金に不自由していた時代と比べると、今は何でもそろっている状態で育ってきており、自身の存在価値を重視している。そこを刺激できると良いと思う。学校から何人出るようにと指示をすると断られるため、学生が主体的に参加したいと思えるような仕掛けがあると良いと思う。

メ: 大人との交流について、誰が企画すると集まりやすいのか。

メ: 吉城高校では地域の大人と語る会を開催している。車座になり様々な話をする中で、高校生は大人を身近に感じ、大人は高校生がすごいことを考えていることを知る。まずは、子どもと大人の敷居を無くす作業が大事だと思う。主体はどちらでも良いと思う。

メ:時間的な余裕はあるのか。

メ:個人によってそれぞれである。

丸:ジモト大学の活動の中で高校生を集めることが一番の課題で難しい。これまで実施した講座の中で観光についての講座に一番集まったが、当時の斐太高校の FRH の活動に近い内容で、観光について知りたがっている学生がいたため、マッチングがうまくいったということがあった。逆に他の講座では大人がおもしろいと思う講師を集めたが参加者が少ない結果となった。チラシも飛騨地方すべての高校に配布したり、全校集会の場でプレゼンさせてもらうなど地道にやったが、これまで活動してきた中で、それが当たり前だという認識でいる。意欲のある子に届けることができ良かったと思うこともある反面、こういう活動に自ら参加してくれる学生は、進路選択がみえている一部の学生に限られているため、進路に悩んでいる子や何をして良いのかわからない、意欲が持てない学生との接点を持つためには、授業内で実施させていただくようなアプローチをした方が良いのではないかと思う。市民活動のレベルでは難しいということを実感している。

メ:きっかけづくりはしたいと思う。教員の中には地域とのつながりの価値を十分認識していない者もいると思うため、そこは課題と認識している。

以上